

土田耕平著

平福百穂畫伯裝幀
アララギ叢書第六十二編

歌集
斑^は
雪^{だれ}

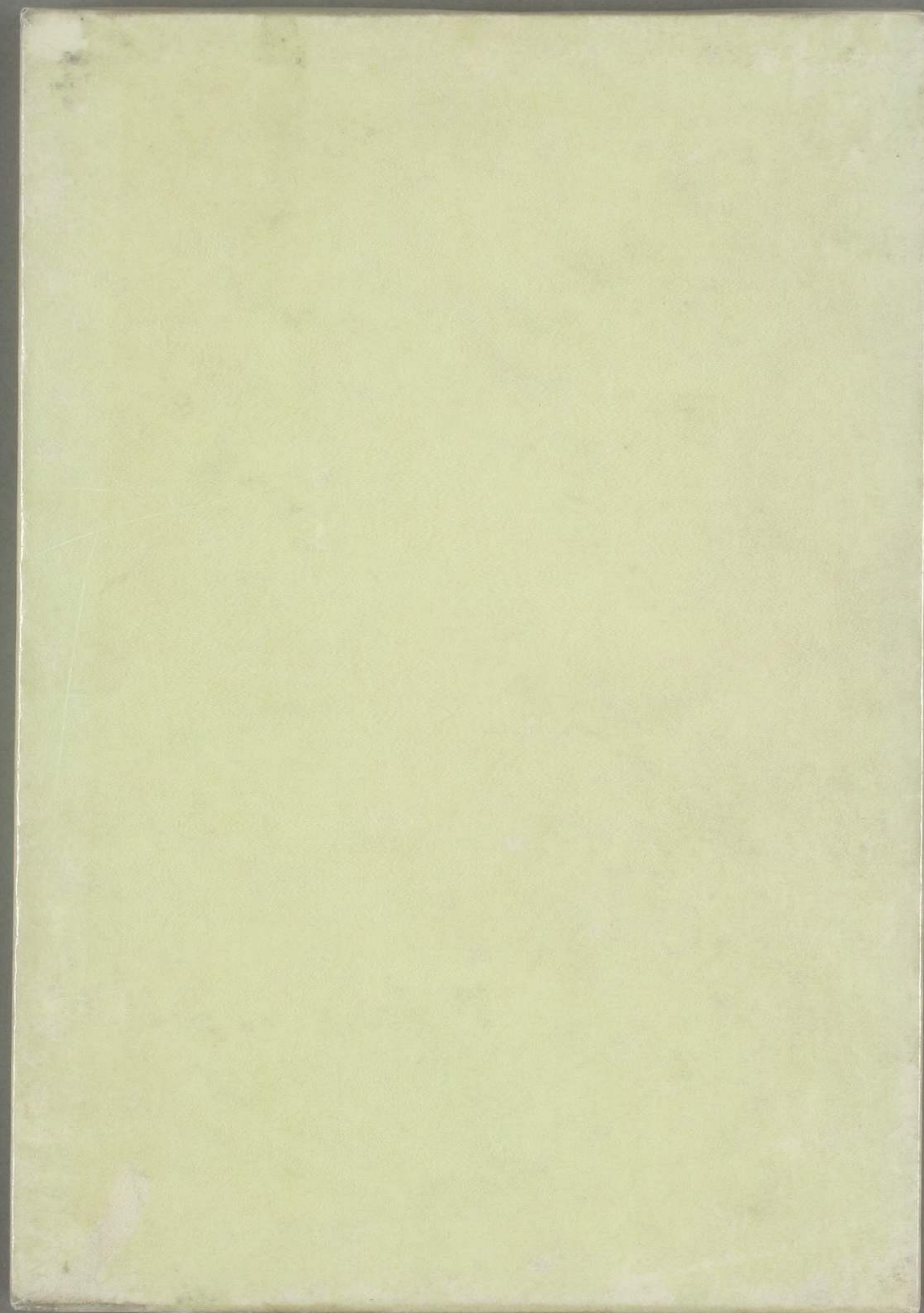
東京 古今書院發行

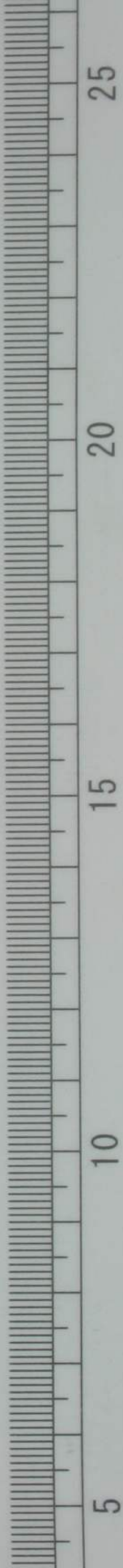
歌集斑

雪

土田耕平著

院書今古



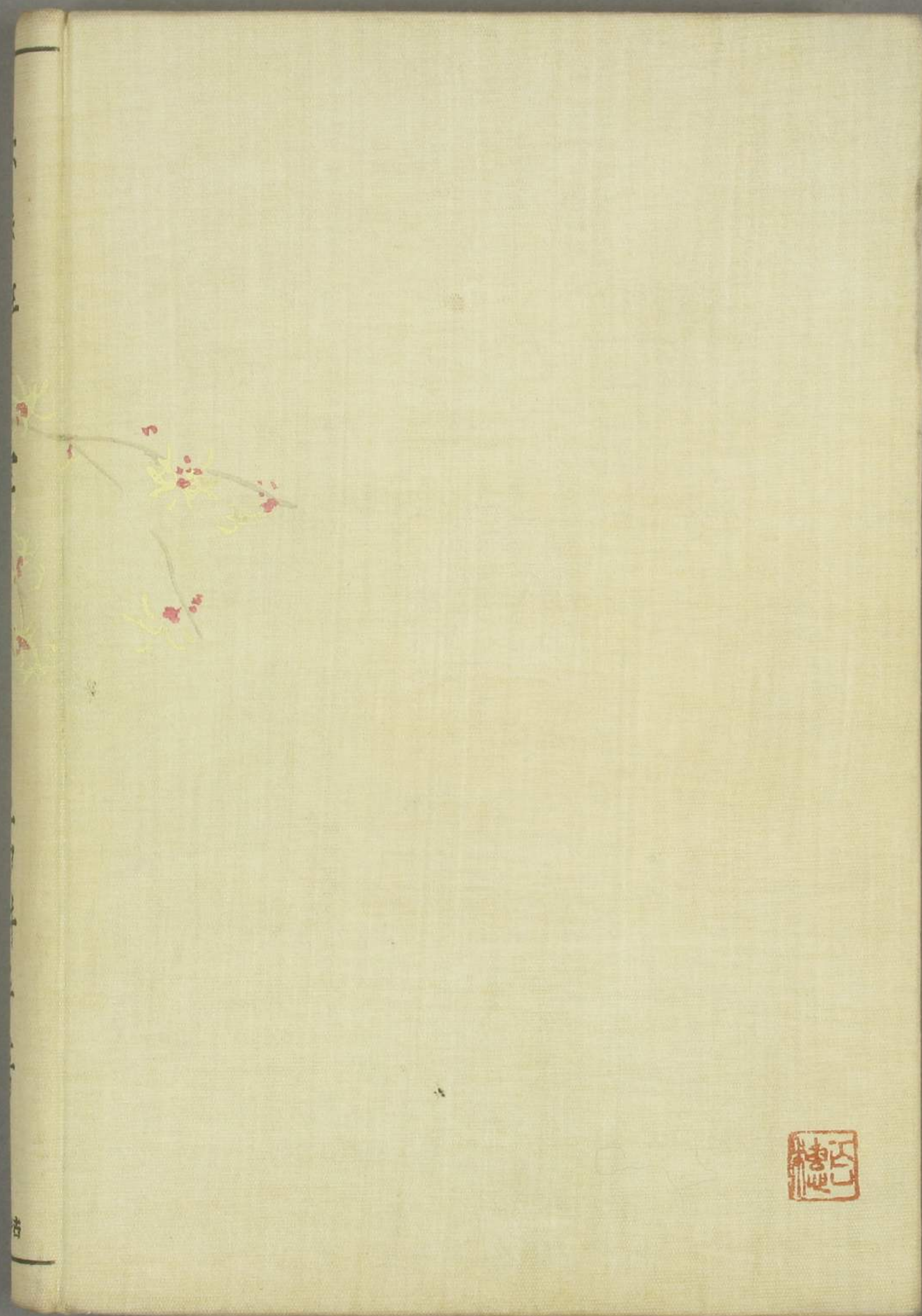


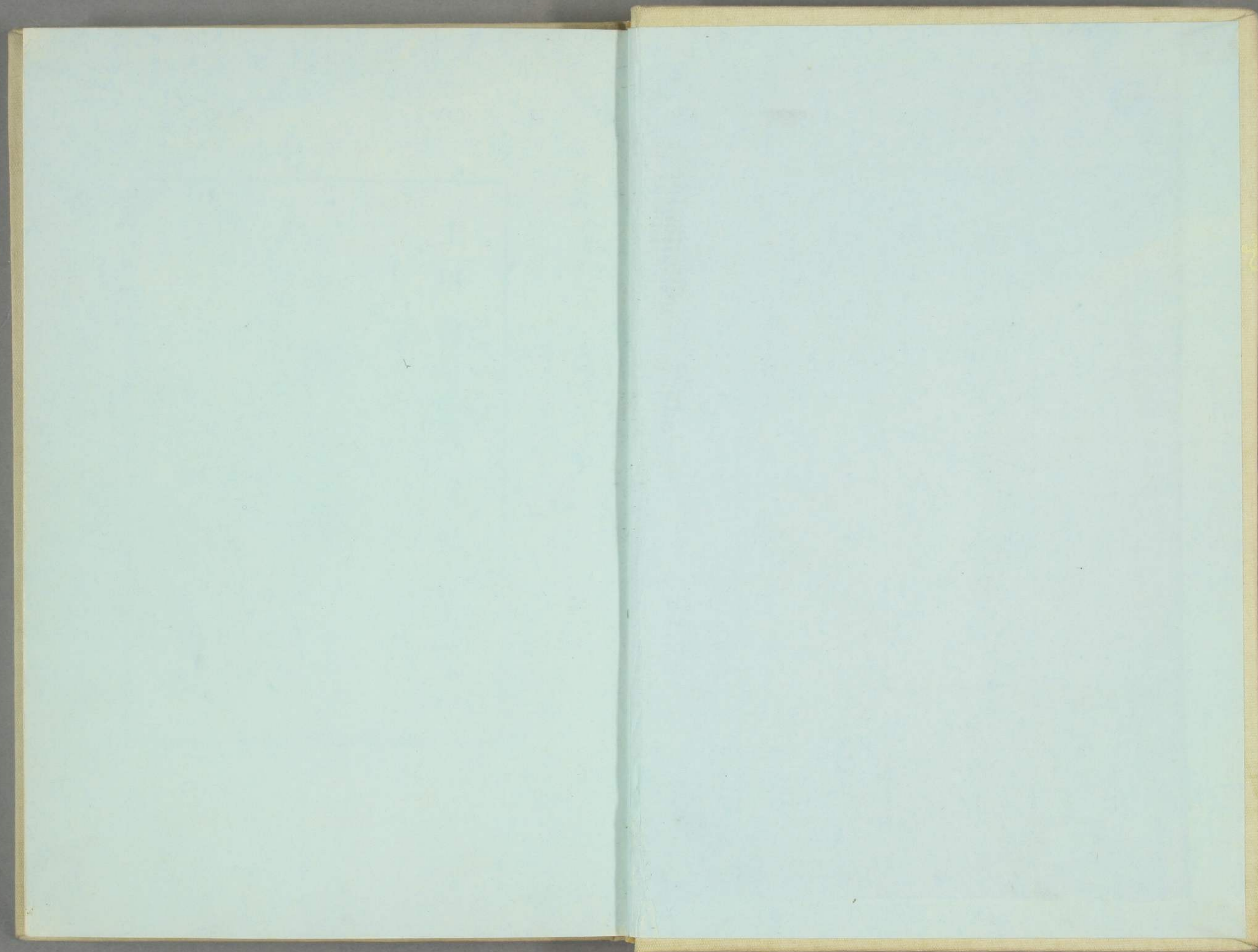
歌集斑

雪

土田耕平著

院書今古





土田耕平著

アララギ叢書第六十一編

歌集
斑^は

雪^{だれ}

東京
古今書院發行

平福百穗畫伯 裝幀及背文字

歌集斑雪内容

諏訪温泉寺(大正十年).....	一
上伊那(大正十一年).....	七
在京吟(大正十、十一、十二年).....	九
飯山にて(大正十二年).....	一九
諏訪地藏寺(大正十二年).....	三
下伊那(大正十二、十三年).....	二七
奥信濃(大正十三年).....	三七
關西移居(大正十三年).....	三

妙法寺山居詠(大正十四年).....六五
須磨在住吟(大正十四、十五年).....七六
明石太寺(昭和二、三年).....一〇六
大和在住吟(一)(昭和三、四、五年).....一三五
大和在住吟(二)(昭和五、六年).....一六三
京都郊外(昭和七年).....二一〇

諏訪温泉寺

没らむ日の光をうけてしづまれる青田のい
ろは久しきに似つ

やや暫し入日の影をとどめたる山の頂^{いただき}を雲
つつむなり

草の葉の葉ごとにのぼる夕露のうらすがし
さを想ひ見るべし

起き起きの心たもてり朝露に濡れしづまれ
る青草のいろ

朝々の霧晴れわたり外^と山^{やま}なる青葉の光つね
に新らし

山かげは眞萩^{まはぎ}しみみの花^{はな}明^{あか}りひねもすにし
て露をたもてり

白木槿^{はくもぎ}きのふをとつひ散りそめて地^{つち}にたま
れる花多くなりぬ

きぞ見てし月の光をおもふときこの降る雨
や久しかるべし

幼弟三首

慌しき年月のまに育ちたるわが弟を見れば
かなしも

うつしみのわが弟よけふよりは兄のころ
にしめて忘れじ

故里に住みとどまりてこれの子を常見まほ
しき思ひするかも

上伊那

森ふかく啼鳥もなしやはらかに履うづもる
る苔をふみゆく

赤石にとほく對^{むか}へる木曾の山夕となれば影
曳きにけり

はるかなる音ともわれは聞きぬしかそがひ
の松を吹ける風なり

ぬばたまの今宵の月夜晴れわたり晝間見ざ
りし山見ゆるかも

在京吟

梧桐^{あをぎり}は幹さへ青しさやさに色映りあふ瑞^{みづ}
葉^はのうごき

山吹のさかりの花に生ひまじる若葉のいろ
はやはらかく見ゆ

ひとむらの葦間をいでて擴がれる水の淺瀬
は音たてにけり

わが門の楓もみぢに朝な朝な日あたる見れ
ば霜によわりし

三日月の光さむけし晝の間のぬかるみ道は
かたまりぬらし

冬ふけし日の光かな庭檜葉のただにそよぐ
を見てをりにけり

降る雪は夜目にもしるし庭檜葉の木ずゑた
わめて積りつつあり

さむざむと麥の葉生えに風なきて夕は霜の
置くらむあぼゆ

憶伊豆大島二首

年々に春の摘菜をともにせし片野のあとを
 人ながむらむ

春されば草生ひかはる岡のべにわが足跡も
 また残るまじ

小佛峠附近三首

峽ゆく水は目^ま下^{した}に見ゆれども遙かなるらし
 音のきこえぬ

見はるかす山の起伏^{おきふし}かぎりなし眞日傾きて
 片かげるなり

小佛の山の尾づたひひとり行く片^{かた}面^{おも}なべて
花芒なり

小吟折々五首

あけくれの寂しきわれになごみごともしく
くれよ胸にしめなむ

をさな子は柱によりて面^{おも}かくす常^{とこ}かくのご
とやさしきものか

わらはごの昔こひしと人はいふわが思ひ出
は泪ぐましも

み佛のころにとほしうつしみはわれ人と
もに悲しかりけり

いささかの草にこもりて白小花咲か
はるとを人知らざらむ

飯山にて

きはだちてふかき峯とてあらなくにこの地
のすがたわれは親しむ

木ずゑふく風あらし鳴く蟬の聲はまぎ
れてまた聞かざらむ

千曲川板橋長しふりさけて越後境の山見ゆ
るかな

木の間には雨の雫のしげくして向うの山に
雪ふりにけり

仰ぎ見る空の色ふかしこの町に雪の來む日
は近づきにけり

國境こくきやうの山低くしてつらなれり北に落ちゆく
千曲の河みづ

奥ふかく何かこもれるものありて北國ほくこく空そらは
澄みゆかぬかも

諏訪地藏寺

湖みづうみを遠く見晴らす山の寺木の葉散りかふ日
となりにけり

音たててしぐれの雨は降りながら片空青し
日あたれる山

しぐれ降る寒夜となりぬ蠟燭のあかりとど
かぬ高さ天井

庭の上の落葉や深きこの夜半にしぐれの雨
のふりそそぐ音

西方さいほうにあはす佛をおもふかな夕やけ雲のひ
かり凝りつつ

山のべの田の刈あとに萌草のはつかに青む
冬さりにけり

踏みわくる落葉の音はもろくして月ぞわが
身に沁む心地する

下伊那

有明の月の光やのこるらし白々しろじらとして枯桑
のはら

おのづからみ冬にむかふ寒風は竹のはやし
に音たつるなり

降る雪をとほして見れば畠むかう竹のはやし
も白くなりたり

ゆるやかに山皺ひける國なれや家居まばら
に冬枯のさま

道のべの枯草かげのほそり水こほりあがり
てけふは音せぬ

なほしばし惠那山のまにたゆたへる夕日の
光あかくながれつ

みんなみの海につづける空ならしゆふべゆ
ふべに雲湧きいでて

天龍のながれゆくへは遠江^{とほたふみ}雲居たなびく海
にかもあらむ

今宮

白鳩はしばらく空に舞へりしがその松むら
にかへりたるらし

元旦試筆

一年のはじめ終りや鴉どりの住みわぶる身
にかはることなし

わが宿のむかひの山に雪ふりて米とぐ水の
こほる朝かな

かへるべきわが宿ありて道のへにふりつむ
雪を見るはたのしも

山路ゆくわが足もとに吹きまろぶ櫓の落葉
はみな乾きをり

中ぞらに一むらがりの暮れ雲はいづちの峯
に寄らむとすらむ

雪どけの水にごりくる門川に飯鍋ひたす春
待ちどころ

春さきの日癖にかあらし片空は日あかりし
つつ雪みだれふる

山吹は實^みならぬ花か水のへにあはれすがし
く咲きさかりたり

かすみ空しぬぎて高し仙丈の雪消えがたに
なりけるかな

見るからに桑の若芽はやほらかし夕日の光
ながれたるかな

奥信濃

天龍の川すぢをこめて雲白し短夜の空は明
けはなれたる

絶えず霧かかりては晴るる黒姫の山の麓に
立ちつつぞ思ふ

流らふる雲脚早し近山はたちかくろひて遠
き山見ゆ

夕雲の紅しづむ裾野原ひぐらしの聲とほく
ひびかふ

おどろしく夏野の原に立てる雲馬は曳かれ
ていなきにけり

黒姫の荒野の土に生ふるもの木き甘茶あまぢやの葉を
つみて食たべつ

裾原につくる桑さへ丈低し人のたづきのあ
もほゆるかな

雨曇りふかくなりたる野のうへにひとつ聞
ゆる郭公のこゑ

夏ふかく木苺の實の熟れのこる山の蔭みち
下りけるかも

夏^{ひと}一日郭公どりのなく聲は森より森に移ろ
へるらし

夕昏るるこのもの蛸のつぎて啼きや
む聲しきりなり

たちのぼる靄の氣^け寒しまなかひに大きく暮
るる黒姫の山

目もあやに霧ふきすぐる山の上佇みてゐて
肌寒くなれり

高はらはさ霧の底にしづまれりただしづく
するあら草の立ち

天霧につつまれはてし高原やいづことも知
らぬ川鳴りひびく

ここに^{のち}して水内^{たか}高井^みの國ぐには夕かげりゆ
く飯綱^{いひづな}の裾に

雲霧はわが目のもとにせまりたり片靡さす
るあら草の群

しめり風とみに吹き來^くとおもふまに霧はう
づまく丘を木立を

夏の夜の月かけあかし下りたちてひとりし
をれば蚊^か喰^{くひ}鳥^{どり}とぶ

稻妻のひらめく下に見ゆるもの道も屋並み
も常の目に似ず

稻妻の白き光は目のもとの草おしてらし遠
闇に消ゆ

稻妻のひかるとき見ゆあつま四阿の峯にひとむら
のさびしき夜雲

日ざかりの暑さはあれど草かげになく蟲の
聲秋づきにけり

夕つゆのおくこと早しとんばうは羽ををさ
めて刈萱の穂に

傘からかさにふるつゆの音をこほしみと木の間の道
を行きてかへるも

ふる雨のにはかに冷ひやをもたらすや砌にひび
く蟬のこゑ

秋桑はうら葉ばかりとなりけり昨日も今
日も吹くあらしかな

夏衣たたみて行李にをさめたりまた來む年
はいづちにあらむ

秋雨の夕べさむきに戸をたてて炊ぎのけぶ
り籠らひにけり

雨はれて日あたる朝は草の穂にとべる蜻蛉
もうれしげに見ゆ

秋ふけしおどろが下におのづから滅ほろびにむ
かふ深き色見ゆ

目にたちて莖立赤し山畠の蕎麥は大方實と
なりにけり

とんばうの羽もこの頃よわりたり日向の縁
にきてとまりつつ

山の端に日は落ちむとして芒の穂むらむら
あかく耀^{かが}ひわたる

星さえて野山ただ黒し妙高の高嶺に雲のま
つはれるらし

うちなびく靄の下べはたそがれて鴉しば鳴
く高杉のうれに

野路はろに靄を沈めて月寒し佇^たちつつわれ
はゐたりけるかも

白雪のあなとおびただし越この山ゆふべ荒雲を
吹きはらしたる

みのり田の色ふけにけりもの何かこぼるる
に似て蝗とぶ音

黒姫の山を掩ひて雲立てばわが踏む道の暗
きを覺ゆ

刈りあげし田た面づ寒けしよべの間に時し雨ぐれや
しけむその溜り水

草の穂に霜ふる頃となりけり飛ばぬ蝗の
つがひゐるあはれ

蕎麥畠も刈りし野寺の軒下に蜂のよりくる
冬近みかも

山川のたぎちの早さ群山のにほふもみぢ葉
ちりそめにけむ

日あたればほろほろと霜のこぼれ落つ岩^{いは}面^も
に寒し龍膽の花

おほよそに野の上の草枯れにけり見いでて
うれし龍膽の花

うら枯れて野の上のみち行くによし今を咲
きをる龍膽の花

赤彦先生舌癌なりとの診断を

受けられしも誤診なりき二首

君病むと聞きしたまゆらおどろきて思ひい
たりし大きいのちを

天つ日のめぐみに馴れて今恐る師よ御いの
ちを長くたもたせ

關西移居

須磨加納曉氏宅二首

二階よりのぞむ海手の空のいろ夕はことに
おもひなごまむ

この丘に友の家居のゆたかなり旅を來し身
をしまし寄せつる

中村憲吉氏に伴はれて二首

うち連れてこの街なかに何やかや見聞かせ
むとの君がみこころ

ぞろぞろと道頓堀の人通り君より外ほかに知る
顔もなし

明石城址二首

冬さびし草原かげのこもり沼歩む足もとに
水しみ滲みつつ

妙法寺山居詠

枯草にまろぶせば日のあたたかさまだいく
つかの蝗とびをり

日の光夕となれば岨そはのうへ目に立つほどの
木の芽にほへり

峽はざまぞら暮れあかりつつあやしくも梟きうのなく
聲こだますも

花つばき落ちたまりつつ紅の下積み早く褪
せにけるかな

ガラス戸の外そと面もに見えて櫻散るうす花びら
に映うつらふ日影

したしめば日^ひ一日^{いちにち}と目にたちて銀杏若芽の
形ととのふ

あらしふく青葉繁山鳴きおこる春蟬のこゑ
はすすろなるかな

草若葉やはらかにして光沁むをしむ心に人
をまもれり

春雨の降りつつ一日暮れぬれば山に響きて
鐘鳴りにけり

川上の村をかこみてまろらなる柴山芽立ち
日はかすみつつ

風脚にしらじらなびく若葉山うつぎの花は
すぎにたるらし

山藤の花はほのけし樟くすが枝に高くかかりて
咲きにけるかも

山やま岨そはの茂木がうれにからみたる藤の花房咲
き垂れにけり

山藤の花の房ふさ短かけれど梢たわめて咲
垂れにけり

山藤の今し盛りとおもほゆる短かき房にこ
ころしたしむ

春興吟六首

おのづから目覺めて聞かな春近き山川の音
夜半にひびけり

春といへば山かひとよむ川音のゆたにさび
しくなりけるかも

春浅き岩間垂り水乏しらにむすぶ氷柱は苔
をふくめり

更くる夜の月霧らひつつ降る雪はひととき
しげく降りにけるかも

山かひに一すぢ白く見ゆるなる川水の音ゆ
ふべきこゆる

山かひをいでてはるかに行く水のしらじら
さびし二分れ見ゆ

須磨在住吟

庭なかにほのかに白き梅の花日さしくれば
 散るかとおもふ

雪ふれば近くも見えしひんがしの摩耶の山
 並春たちにけり

はつ春にむかふこのごろ海山のあひだの空
 はきよく澄むかも

春近き須磨の里山夜の目には霞ながれてい
ちじるく見ゆ

霞かげふかくなりつつ磯の上を走る電車に
灯ひの入れる見ゆ

芍薬の赤き芽立ちよいつのほどにかくは伸
びしとおもほゆるなり

わが庭に來啼くうぐひす朝な朝なわれのめ
ざめをゆするがに啼く

うぐひすのこゑほがらかにきこゆなり朝さ
めてゐるわが聞そとに

日ごとに聞きしうぐひす聲せぬは人里なれ
て捕られやしけむ

すがすがし蒔蓀草のゆで汁をみぎりの石に
うちあけにけり

さつき晴朝吹く風にはためきて大き鯉のぼ
りをちこち立てり

鯉のぼり風をはらみてころよしなびきひ
るがへる薨の上に

海岸^{うみぎし}にうちあぐる芥^{あぐた}あびただし梅雨の空す
きて南ふく日は

梅雨あけのうすら日あつし砂の上にここだ
も白く寄せたる人^{ひと}手^で

樹ごもりにもし火見ゆるわが小家夜ふけ
てひとりかへりきにけり

夏花の鐵砲百合は葉ながらにいきほふさま
を活けてたのしむ

一束^{つか}ね瓶に挿したるロベリヤの水よくあげ
て涼しかりけり

暮方の影ふかくなりし庭くまに石^つ路^はの葉^は立^た
ちのさみしき光

宵ごとに口^{くち}水^{みづ}ふきてしたしもよ籠^{かご}の螢^{へい}のみ
な光りいづ

蘭の葉と高山菊と一束に活けてすがしむ人
のたまもの

今年はやつくつくほふし啼くころとなりし
をおもふ汗ぬぐひつつ

夏深き藤の青葉となりけり下べの土に蔭
のしづかさ

夏ふけし光のなかにひそやかに木草は蔭を
おとしそめたり

いちじゆくの実も葉も青しさわやかに朝け
の風は秋たちにけり

鉢伏の峯のうす雲たなびきて時雨のあめは
海にふるなり

たまたまにつくほふし鳴くこゑのして木末
の空はすみわたりたり

いづくゆかものの烟のながらへり日をこめ
て降る秋の雨かも

野の道は多のころ草の穂にいでてわが項^{うなじ}ね
の日焼くるおぼゆ

雨晴れの日はいちじるし藪かげにいたくみ
だれて射しにけるかな

藤豆はかたくなりつつ朝にけに葉分の風の
吹きそめにけり

やや秋の風吹きそめし葉ごもりにともしき
ものか栗の青毬

水のごと空すみわたる晝つ方われは庭べに
ありたち_にけり

差潮の波あふれきつひとたまり渚の砂はひ
たされ_にけり

日の光疊にとどくころとなれり散りうすれ
たる榎木のこずゑ

はぜの葉のもみぢはしるし門_{かど}の外_との敷石み
ちにけさも散りをり

朝けよりしぐれ曇りのさむくして山のもみ
ぢ葉にほひしづめり

山にして落葉のにほひさびしめり時雨の雨
の降りもふらずも

やうやくに冬のさびしさ^{ひさしど}庇戸に落葉ふく音
は雨をまじふる

あかときをめざめてをれば屋根の上に霞ひ
とときたばしるきこゆ

火鉢に手をかざしつつ聞きてゐる霰の音は
やや久しけれ

散りのこる一^{ひと}木の紅葉ゆふ雨にぬれてあか
るむここちこそすれ

時さむくこよひはあろす^{しとみど}部戸よりあびただ
しくも葉のこぼれけり

菊の花伐りつくしたる庭床にこの朝いたく
霜ふりにけり

をりふしに藤の實み菴さやのはじけとぶ冬の日な
かに音ぞさびしき

須磨寺や龍華の橋をこえくれば冬小鳥鳴く
松の木の間

海うみなかに紀伊の崎山遠くあれや白々しろしろとして
雪のふりたる

夕日にはまさやかに見ゆみんなみに紀伊の
崎長し冬枯のいろ

紀伊の崎山ひだひだのこまやかに夕日にし
るく見えにけるかも

雨まじり降れる水雪いちじるくさ庭の土に
たまるともなし

夕されば門べにたちて遠山の野火をこほし
くながめつるかも

遠山の野火見るところとなりにけりわが故里
の山も焼くらむ

雨晴れの光あかるき道芝に鳶まふ影の大き
くうつる

近江石山寺三首

鐘樓を人はひりしか石段をくだるわれらに
鐘鳴りきこゆ

琵琶のうみ石山寺の見晴らしに寒さしのぎ
てしましたちをり

あからかに夕日いたらぬくまもなし入江へ
だつる枯葦の山

大和遊草四首

あしなべて芒すがるる頃にきて大和の國を
こほしみにけり

藥師寺^{やくしじ}み塔の立ちをあふぐ目に時雨はれま
の空ふかくあり

年月日^{としつきひ}いや古りて立つ藥師寺^{やくしじ}の塔に吹きか
かるあはれ雨雲

寒き日の光はうごく松の間に唐招提寺屋根
傾けり

悼赤彦先生

たふとき老の境に踏み入らむ君のみ命を乞
ひのみしもの

悼飯島鶴子

うつしみに相見ることなかりつる人のみ
たまをよびつつ泣かゆ

皇孫のあれまさむ日の近づけば民草われの
ねがひ微けし

一ノ谷友人の佳居二首

白萩の花見にと來し岡のうへ今日の淡路は
よく晴れにけり

萩の花かく咲く宿にありへなばやがて風た
つ亂れさへ見む

明石太寺

日あたりのこの岡のべに冬蓬白くやはらか
くもえにけるかも

朝なさな高野のはらの青嵐さやけくもある
か肌にとほりて

麥の穂の出そろふころかうちつづく野の末
 べまでなごむ色あり

播磨野は西にはろばろしやはらかき萌黄若
 葉は雲のごと見ゆ

露白く茅花つはなの絮わたにしほたりて野の上の朝は
 未だ早きかも

夏といへば適あくおもひあり青山のすが山の
 上に立てる白雲

加古懷古一首

よき人のありけむ昔おもほえて身にしむば
かり夕あかね雲

ははさぐさこころよきほどしげりたる背戸
の小道に霧雨のふる

まなかひに淡路の島の峽より白雲ふかく立
ちわたる見ゆ

白粉^{おしろい}は朝はみながらしぼみをり黒き粒實に
露たまり見ゆ

きはやかに紅あけに染めるは春山の裾わ田にし
て紫雲英むらさきぐも咲くなり

夕立の雲立ちわたり暗くなりつひとときに
してさわぐ草原

雲くらき動きのまにまとして落ちくる
雨か大野らの上に

即事

汲みたての井戸水がもつ匂やかさかくしも
我れのあるべかりける

蟪蛄はまだいとけなしふるかまのおぼつか
なくも身がまへをする

山かげの暗き田^{たづ}面をとよまして蛙なく夜は
更けゆきにけり

灯ともして心おちつく宵よひにふゆる蟋蟀
のこゑをぞおもふ

目のかぎりつづく青田やしづまりて今落ち
んとす夕日の光

海峡をゆく船がならす笛の音くもり夜にし
てとほくこだます

日の入のすすしさおほゆ風のむた築岸^{つゐ}下^{した}に
よる波の音

ゆるやかに波をのしくる海のおもて百千^{もも}の
帆ぶね沖に浮きたり

初秋^{はつあき}風吹きこそわたれ萱むらのぬきいでし
穂はいつせいに見ゆ

あかつきのさしそむ光おもほゆれ草の葉さ
きに張る露の玉

ゆふぐれて小燈^{ことう}に灯を入れにけり家居めぐ
らす蟋蟀のこゑ

月はいまいでしばかりにうらすがし光は草
にながらひにけり

朝焼の空遠あかくうつろへばいつか降りぬ
る草山の雨

山上にたちてしましく天つ日の光になごむ
わが息をしつ

青蜜柑かたく緊^{しま}りてわが庭に秋の日數のす
ぎゆかむとす

啼く鳥のこゑはこぞりてきこゆれど狭霧に
くらき時たちにけり

土のうへに散れる漆の一枚葉いろあざやか
に動くがごとし

時雨のあめしばしば降りわが庭にコスモ
スの實のむらだてる頃

雨ざりにとざされし日や海の方にたまたま
とよもす船笛の音

海ごしにつぶさにみれば家並めて野島あた
りはともしきところ

瀬戸の海は夕日時雨のきらふなかに一つお
ほさく小豆島見ゆ

ふりさけて三日の月こそかすかなれ心にひ
とをこふとあらねど

ひんがしに時雨の雲のすぎゆきて黒く小さ
く須磨の山見ゆ

四國路の山さへ近しうち晴れて海のかぎり
は穂立つ白波

夕日しづむ方にひろらに見えわたる瀬戸の
内海やただ風ぎてあり

たちなびく高萱むらのいきほひのさながら
にして枯れにけるかも

をりをりの心なぐさにいでて見る背戸のほ
そみち末枯れにけり

朝あさの霜をかむりて鶏頭のくれなゐ深し
くづれそめつも

うすき日の光ににほふ草紅葉ひとり歩みを
とめてきにつつ

まれにして降りける雪は島山の外面つかさをあざやかにせり

見とほしのひろき畠原音たてて大根車つらなりとほる

こがらしの吹きあれし日のゆふがたは障子の棧に塵たまり見ゆ

三日の月立てるを見れば久方の天路はきよしただはろばろと

三日の月見るにはかなしこれの身は後世ごせの
たのみもありといはなくに

入日ぞら紅震くれなゐふときのまは寂しさ耐へても
ののおもほゆ

落ちかかる日をさへぎると見し雲の一紅ひとくれなゐに
燃ゆるさびしさ

春さむき人丸山の墓どころ散歩にわれはす
ぎて來につつ

裏野べに冬をとほしてゐる雲雀やうやく聲
のしげくなりつる

露の臺摘みしお指にやや苦^{にが}さかをり染める
をなつかしみつも

大和在住吟
(一)

疋田

ほととぎす啼きてすぎぬれ一聲はわが屋根
の上にややにまぢかく

さみだれの雲うごく上にたまに生駒ヶ
岳のまろき背が見ゆ

郡山

秋暑き里に移りすみ養魚池の臭にほふ端居を妻
とかなしむ

落葉する早とき遅きあり郊外の家居したしみ
秋逝かむとす

庭下駄をひきかけて來つ吹きながるさ霧が
なかに井戸水を汲む

庭石に鳥の糞しろくこびつけり雨さへふら
ぬ冬のけながさ

冬ひでり稀有^{けう}の年かも水減りし井戸の釣瓶
の縄つなぎ足す

汲みあげし井水てのひらにうけて見つ冬の
ひでりにうす濁りせる

金剛の山の頂のとし火は星夜のそらにま
じはりて見ゆ

雲とちて金剛山のとし火の見えぬ夕とな
りにけるかも

のどめりとおもふ二月の晝日射小さきつむ
じ庭の上になつ

塀の上に朝々あふぐ大櫟芽吹かむいろにな
りにけるかも

春山に來居る鶯すみやかに木の間たちぐく
今啼かむとか

ひとときに伸びたちける若竹の古竹に並
びまだなよなよし

浅き夜を萩のみづ葉に露ふりてさむしとぞ
おもふ空さえてあり

萩といへばひとへに秋をいふあれど瑞^{みづ}の若
葉ぞわれはたのしむ

ひそまりて庭の木がもつ下陰り梅雨に入り
てよりいく日か経つる

目暮れたる空には雲のたたまれり啼きて遠
 ぞく五位鷺のこゑ

あかかりし芽どきはすぎて楓かへるでの若葉しづか
 になりけるかも

燕つばくらはけさや來ぬらし廣野原あらし吹くなか
 に見えて飛びをり

舞ひかけり燕つばくらはなく草のうへ草なみ繁くな
 りにけるかも

郡山城址三首

岡こえて城のみ濠は遠からず朝咲く蓮^{はす}を見
むとわが來し

濠のおもて咲きうづめたる蓮の花のさかん
なる氣をたちてききをり

むらだちて咲く蓮の花外濠の高石垣に朝日
照りつつ

ひとしきり夕立に似てふる雨にわが庭の木
のわくら葉ちるも

雁四首

雁がねのわたるを見れば列^ちづくりゆほびか
にして亂れざりけり

つらなりて行くや雁がねゆくりかに一つが
啼けばやありてまた

雁の列やうやく近くわがあふぐ眼^{まな}上^{うへ}を過ぐ
その腹白し

雁がねは啼きつつわたれ中空に列のひろが
りのいつくしきかも

寒き靄ありぬしづめる地の平日たひらはいづかた
に入りしにやあらむ

ガラス戸をたてこめて外そとの音うとし風吹き
しなふ松のうれ見ゆ

葉鶏頭寂しき朱あけに映えにける秋のみ園に異こと
草くさもなし

雪ふればをちの高山低山も人ひと氣絶えゆくす
がしさを見む

木の下もとに青み保てる笹生あり冬の夕日は一
丘に照る

この頃の月は北寄りにいできたる枯々白し
わが背戸の庭

立冬有感

これの世に淨らかにして終らむと言ひてし
人も早く世になし

わが井戸の水なごやかにぬく温みもてり冬の朝
けを起さいでて汲む

さ夜時雨ふる音きこゆかへりたる人須磨驛
にありたつ頃か

松の尾の松のそびらにまどかなる天の夕日
をわが見つるかも

郡山城址

外濠の松の並木を見めぐらす城ひろびろし
冬枯れにけり

上村孫作氏令妹結婚

足引の山間のあしび花にほふ宜^うべつつまし
く副^たはせ妹背

生駒山二首

山上にケイブルカアをおりたてばあはれす
がしき山つばめの聲

黒けぶりのおほへる下は大阪か水田遠光る
國を見下す

畝傍山三首

岩山に立てる松の木は細けれど木肌ふしだ
ちて皆古木なり

峯の茶屋姥ひとり住めり古縁に松の花粉の
吹きかかる頃

古の明日香の里をただそこに見つつしわれ
は虔つしましくすも

岡寺

躑躅花にほへる岡の龍蓋寺たのもしくわが
詣でつるかも

飛鳥寺

野の中に小さくのこる飛鳥あすか寺でら名をししたひ
て人まゐるなり

菖蒲ヶ池古墳二首

世を遠きあやしみごころ古墳ふるつかの洞どうに立ちて
見る比翼ひよく石棺せきくわん

石^{せき}櫛^{くわく}の中は乾きのしるくしてものの苔さへ
たたぬうつろさ

島の庄

松くろき眞弓の岡を相望む島の宮居の跡ど
ころかも

途中四首

明日香路を藤原にいでむみちのほどわが目
に近き岡かぎろへり

夕かげに川水とほき光あり明日香はひらく
藤原のくに

輕^{かろ}のみち戀^こひつつ來^きり目の下^{もと}の夏草はらは
あらくかぎろふ

まなかひに夕陰^{ゆい}りこし黒肌^{くろはだ}の畝^せ傍^{はた}が岳^{だけ}にな
く鳥もなし

二月三日奈良

燈籠^{とうろう}はみなともれりと見てゆくに一つ二つ
はともらぬもあり

大和在住吟
(二)

身ごろの落ちおとろへてあるときに空と
びかける夢などを見る

青田風ふさくる縁に坐りたりすがしとぞお
もふその時のまを

わが宿をめぐりて廣き水田原つばめの來る
はみなみ空より

裏庭のおどろはなべて花咲けりしろじろと
して夕かげに見ゆ

臥床ふしどに近くきこゆる雨蛙あまぐはむしむしとして今
日も降らぬか

草はらは間なく波だてり白々しろしろと葉裏をかへ
す風の吹きゆく

夕立の雨うちふれり庭のへにひとつの蟬の
啼きとほるこゑ

夕立はそれてしまへりひとしきり池のおも
てに波だちながら

葉に茂る稻田の底に水あれか月の光のうつ
りつつ見ゆ

西日さす簾の外にをりをりに蜻蛉の羽のひ
らめける見ゆ

草合歡はすでにねむれり夕ぐれの岡のへ來
れば空のあかるさ

病やや癒えむ望みをもちそめて秋のはじめ
の日射に對ふ

故加納曉氏

快こころよく老後のことなどいひいでし友の面わの
目にのこりをり

故赤彦先生

世に在まさば心すなほにつかへむと思ふ先生
を夢に見にけり

更くる夜の月に對へり古の侘び人どもか
くてすぎしか

秋くさの花のさかりもすぎぬらし徒にして
國戀ひにつつ

澄める空夕づく見つつうつそみは煙のごと
くおもほえにける

露じもはこまごまふりて天つ日に映ゆると
もしさ庭草の上に

啼鳥のこゑをこほしく下りたちぬ露じも霧
らふこの朝の庭

わが行かむ遠野の家をたのもしく心にもち
て明し暮せり

閑いとまなくいます人らのかへりみに我や閑の日
を送りをり

われ病みてものの甲斐なくありしとき奥あ
る人のことは沁みぬ

黙もくに安くすぐす日頃よ一つ家やに妻の起居たちも
氣にかからざり

貯水池の水落したる干潟より泥臭きにほひ
一日吹きけり

竹藪のこもる家居にいぶせさよ秋すぐるま
で蚊帳吊るなり

降りいでし雨定まりて天雲の淡きところと
濃きところ見ゆ

冬に入る山のなぞへに目立つなるけえぶる
かあの鑿割の陰

枯草葉とりどりに染み立冬の
はげしくあらぬ國をこほしむ

空のいろ朝けは深しあらかじめ今日もしぐ
れむひそけさにあり

がらす戸に日のうすく射し外をみれば地霽
たてり寒き時晴

粉雪のちりしばかりにけふの日も夕となり
ぬ山の雲低く

枯色にあちつきて來し萱くさの草なみ濡ら
し晝の雨ふる

寒の雨そそぐ門べの棒杙に鴈うちとまりし
まし濡れをり

ひとしきり疾風^と鳴り來れ葛城の山の頂にた
つ吹雪雲

時のまの吹雪はすぎつまなかひに立ち來^く山
脈々と白し

さむざむと雪のあがりも見ほしきに山こと
ごとくさ霧に立てり

下りたちて凍れる土を踏みにけり表面^{うへ}にじ
みて日のあたりをる

門の外^とにつづく枯原夕眼にはさざり沈みて
土に入る見ゆ

秋くさの千草の花におくれ咲く龍膽を戀ひ
野道は行かむ

やや野分吹きそめにけり故里にかへらむと
して未だ歸らず

いく夜さを月すみにすみ望月の今宵もすむ
にわれはあどろく

早春の日は竹むらにさしをりてまなくさわ
やぐ風明るなり

野のみに雪解の溜りまたぎゆく温とき日
射わがうれしけれ

夕日さし霞の上に浮びたる大峯の山雪か光
れる

松風は我家わがのうへにわたりをり春べにむか
ふ音のしづかさ

まだ浅き春はひねもす風だてる裏竹藪に夕
日のうとき

西裏の草屋にそへる梅ひと木つくるはぬま
花の多さよ

ささ鳴のとき聞きすごし鶯の聲のはるけさ
ほがらほがらに

春の日の日射夕づき水蠟樹^{いはな}の葉相重なれる
透影の濃さ

暮あひを雪ふりさかり竹藪のガラス戸外は
白みかへりぬ

眞竹やぶ雪ふりあもりむきむきに傾^{かた}げる竹
や上透きて見ゆ

實をもてばあよそ枯れづく藪竹の乾裂^{ひさ}くる
音は何かとあもふ

奈良公園三首

あ
の
づ
か
ら
霜
ふ
せ
ぐ
ら
む
松
蔭
か
枯
芝
原
は
こ
こ
に
萌
え
そ
む

し
か
す
が
に
目
の
暖
か
さ
枯
芝
に
や
す
む
わ
れ
ら
に
鹿
の
寄
り
く
る

春
日
野
を
見
に
行
き
し
か
ば
一
房
の
あ
し
び
袂
に
入
れ
て
か
へ
り
ぬ

朝
ぐ
も
り
雨
ふ
ら
む
と
す
木
の
く
れ
に
乏
し
き
い
ろ
を
た
も
つ
山
藤

はるる氣の風にかあらむ山藤のからむ高枝
おほにゆすりて

自然生えひとむら咲けるげんげんの花やか
くるる雑草のなかに

おのがじし紫雲英手につみかへりくる幼き
三人同胞ならし

さみだれに近づく雨のふりてをり眞竹のや
ぶの筍あそし

すかんぽの穂花もさびて散りゆくかおもひ
なぐさむ日とて少なし

學園の日ひみなみはた南畑になりしちふ早き苺を皿に盛
りたり

柿の葉はくろみ萎しなえし梅雨の入り日薄き照
りのをりをりにして

赤とんぼすでに飛びかふ夕日空萎なえしいの
ちも歡びに似つ

秋山のうれ吹く風は寂しけどひとときにし
て音すぐるなり

夕靄は南澤より流れつつ素黒く浮ぶ松の尾
の山

故里のよき山川は目にあれど遠地に病みて
いく年ならむ

色づける本草の亂れ身に沁みてしましく縁
によりてぬむとす

こぞの春われ山べより掘りてこし萩もみぢ
せり思ひ沁むがに

厠戸をおほひからめる蔓草のみながら素枯
れ雨にぬれをり

わが門の大木の紅葉今朝見れば心曳くまで
にさびれけるかな

漆^{うるし}一木残る隈^{くま}なき赤ら葉ぞわれにはすぎて
痛^{いた}々^{いた}しけれ

冬至

短日のきはまればまた復かへるなる天の御蔭ぞ
うたがはざらむ

木の梢えんをきけば幽けき残り葉かけふも果はな
く澄む空のいろ

雨にぬれて加古かこのみ寺に詣でしは七なな年とせ前まへか
妻もとめにて

古の人のころは素直にて浄土に生る道ひ
らけけむ

とりとめて何ぞとおもふこともなし角力を
見たしなど時たま思ふ

ありがてに心いぢけし日も過ぎて月澄む夜
半をはかなくぞおもふ

み佛の法^{のり}盡きむ世のさまに似て丹雲^にすさま
じ西のはたてに

夕雲は永久^とのひかりにたなびけど東の間に
して跡をとどめず

京都 郊外

松の芽のこにほふ五月ごがつは近づけり二階より見
る衣笠の山

かばかりの病とおもふときもあり障子戸に
より山をながむる

日を重ね月をつもりて臥ふせればとりとめ心
なくなりぬべし

樽桶に住みし聖^{ひじり}もありけらしこころ違^{たが}ひて
かくわれは病む

衣笠の山は木高き赤松の幹すくすくと夕晴
に見ゆ

柳の芽色ばむころのこほしさよ病^{やま}のいのち
をいでてきにける

ここにして國のはたてにうちなびく山いく
ところ夕日あたれる

わが垣の外に一木のさくら花夕をさむく雨
もよひせり

西山のほとりに住めば春鳥の囀るこゑも思
ひ沁むなる

北山のふかき峯より日をあかず降りくる雨
は花を侵^{をか}さむ

おもむろに春すぎむとして若萌の影は庭へ
に屋根のへにあり

眞晝まの雨あかるけれさくら花まなくし散
るが土にはりつく

われかねて遠さねがひにありけらし京のほ
とりに行^{ゆく}春^{はる}に逢ふ

播州回顧二首

片丘に家居しをりて幾夕べ加^か古^この入日にこ
ころとめけむ

雲ふかき海のかなたにたゆたへる夕日の朱^{あけ}
は常^{とこ}世^よながらに

白つつじ盛りの花に日は永し心さびしくも
思ほゆるかな

さつき空たまたま晴れて夕映えぬ雲のなび
きの南^{みなみ}に長く

黒谷五首

いつよりのねがひにありし黒谷^{くろや}に聖^{ひじり}の跡に
けふまゐりけり

山添ひにしたしき徑の瑞^{みづ}青^{あを}葉^は法然院はそこ
にこもれる

さわがしき世さへいつしか過ぎゆかむ木ご
もり深き御跡^{あと}をろがむ

春蟬の啼くはあはれに黒谷の山のわたりは
ただ茂り松

ここは京鐘の音^{おと}四方^{よも}にひびくなり病みのい
のちをしましく保つ

比叡山四首

山越の彌陀を拜まむ蔭みちはいづかたにや
と思ほゆるかな

眼下まなしたに琵琶のみづうみ展ひらけゐて泣かまくの
思ひわれはするかも

古より幾いく人の僧がこの山に光をつつむ生なを
すぐしけむ

駕籠かごにして比叡ひえい山の道越えゆくにしたがひ
歩む妻はかたへに

祇王寺四首

いにしへの祇王きわう佛ほとけの跡どころ木魚音する庵あん
のうちより

祇王寺の入りはひの林泉しきに眞清水の湧きあふる
るをしまし見てしか

片岡にはかなき庵いほりむすびたりうつくしかり
し女子をみなごの果て

あなあはれ十七歳の佛御前が身の榮えより
髪をおろしし

清瀧四首

この頃の雨濁あまどろりせる清瀧の波を見おろす涼
しかりけり

たちて見る清瀧川の水早し青松葉ちる頃ほ
ひにして

老^{おい}ふけし芭蕉が此處に一日^{いちにち}の句案にふけり
立ち去りけらし

水^{みづ}遶^{めぐ}る清瀧山のたたずまひこひしかりけり
古^{いにしへ}のひと

卷末附記

此度第二歌集^{はたれ}雪刊行につき、御配慮を賜はつた人々の芳名を記して謝意を表したいと思ふ。即ち装幀は平福百穂畫伯、原稿筆寫は上村孫作氏、校正は五味保義氏、その他刊行の手順一切につき一方ならぬ御配慮を土屋文明先生に仰いだ。なほ齋藤茂吉先生の御配慮を仰いだ。發行所古今書院よりは、著者遠隔の地にあり且病中のため二重三重の御骨折を願うた。今私は、この集の内容につき、自ら啣ちごとを述べようとする心持など毛頭ない。とにもかくにも、よき先進について作歌のみちを歩みつづけ來たことを、心より有難き因縁と思うてゐる。

この集に收めた作歌の年間アラギの諸先輩はいふまでもなく、

住地の關係上特に關西及び信州の諸同人、それに郷里信濃教育會の幾多の人々から、精神的にも物質的にも恩恵を受けたことは述べつくせないほどである。かくして自分は、あるべくもなき生をつぎ、好みとする作歌のみちに携つて今日に至ることを得たのである。

春山の雪はだらに霞む頃ほひ、木末に轉り交す百千鳥の聲々は、止むに止まれぬ必至自然のいきほひである。自ら聲韻の低くくぐもれるを知りつつも、なほ時にふれて三十一文字の歌調にあそばずにをられぬのが、自分の生涯なのであらう。

一月二十一日

ハケ岳山麓にて

土田耕平

昭和八年三月十二日印刷
昭和八年三月十五日發行

歌集班雪

定價壹圓五拾錢

著者 土田耕平

發行者 東京市神田區駿河臺二丁目十番地
橋本福松

印刷者 東京市神田區美土代町二丁目一番地
島連太郎

版權
所有

發行所

東京市神田區駿河臺
二丁目十番地

古今書院

振替東京三五三四〇番

三秀舎印行

アララギ叢書目次

第一編	島木赤彦著	馬鈴薯の花	古今書院發行 定價一圓八十錢
第二編	齊藤茂吉著	赤く光る	絶
第三編	古泉千樞著	屋上の土	改造社發行 定價二圓五十錢
第四編	島木赤彦著	切き火	絶
第五編	齊藤茂吉著	短歌私鈔	絶
第五編	齊藤茂吉著	短歌私鈔	絶
第六編	中村憲吉著	林泉集	春陽堂發行 定價一圓八十錢
第七編	齊藤茂吉著	童馬漫語	品
第八編	島木赤彦著	氷魚	岩波書店發行 定價二圓五十錢
第九編	長塚節著	長塚節歌集	品
第十編	齊藤茂吉著	あらたまたま	春陽堂發行 定價二圓四十錢
第十一編	伊藤左千夫著	左千夫全集	絶

第十二編	松倉米吉著	松倉米吉歌集	古今書院發行 定價一圓五十錢
第十三編	土田耕平著	青杉	古今書院發行 定價一圓八十錢
第十四編	石原純著	霰日品	切
第十五編	中村憲吉著	しがらみ	岩波書店發行 定價一圓八十錢
第十六編	島木赤彦著	歌道小見	岩波書店發行 定價一圓五十錢
第十七編	アララギ所ギ編	灰燼集	古今書院發行 定價一圓八十錢
第十八編	島木赤彦著	太虚集	古今書院發行 定價二圓二十錢
第十九編	村上成之著	翠微集	古今書院發行 定價一圓五十錢
第二十編	土屋文明著	ふゆくさ	古今書院發行 定價二圓三十錢
第二十一編	島木赤彦著	萬葉集の鑑賞及其批評	岩波書店發行 定價二圓
第二十二編	岡麓著	庭苔	古今書院發行 定價二圓五十錢
第二十三編	島木赤彦編	アララギ三年度年刊歌集	岩波書店發行 定價一圓五十錢
第二十四編	アララギ所ギ編	故人歌集 1	近刊
第二十五編	齊藤茂吉著	つゆじも近	刊

第二十六編	齊藤茂吉著	金槐集私鈔	春陽堂發行 定價二圓八十錢
第二十七編	齊藤茂吉著	良寛和歌集私鈔	近刊
第二十八編	齊藤茂吉著	童牛漫語	近刊
第二十九編	門間春雄著	門間春雄歌集	岩波書店發行 定價一圓九十錢
第三十編	平福百穂著	寒竹	古今書院發行 定價二圓二十錢
第三十一編	藤澤古實著	國原	岩波書店發行 定價二圓六十錢
第三十二編	島木赤彦著	梯蔭集	岩波書店發行 定價二圓
第三十三編	發アラ行ラ所ギ編	大正十四年度年刊歌集	岩波書店發行 定價一圓五十錢
第三十四編	發アラ行ラ所ギ編	故人歌集3	近刊
第三十五編	岡、麓著	歌謡代々木雜筆	近刊
第三十六編	中村憲吉著	輕雷集	古今書院發行 定價二圓
第三十七編	發アラ行ラ所ギ編	大正十五年度年刊歌集	岩波書店發行 定價一圓五十錢
第三十八編	結城哀草果著	山麓	岩波書店發行 定價二圓三十錢
第三十九編	高田浪吉著	川波	古今書院發行 定價二圓三十錢

第四十編	齊藤茂吉著	短歌寫生の說	鐵塔書院發行 定價一圓七十錢
第四十一編	發アラ行ラ所ギ編	昭和二年年度年刊歌集	岩波書店發行 定價一圓五十錢
第四十二編	伊藤左千夫著	左千夫歌論集卷一	岩波書店發行 定價四圓三十錢
第四十二編	伊藤左千夫著	左千夫歌論集卷二	岩波書店發行 定價四圓三十錢
第四十二編	伊藤左千夫著	左千夫歌論集卷三	岩波書店發行 定價四圓三十錢
第四十二編	伊藤左千夫著	左千夫歌集	岩波書店發行 定價三圓五十錢
第四十三編	土屋文明著	往還集	岩波書店發行 定價一圓八十錢
第四十四編	發アラ行ラ所ギ編	昭和三年年度年刊歌集	岩波書店發行 定價一圓五十錢
第四十五編	竹尾忠吉著	八衢	古今書院發行 定價二圓
第四十六編	高田浪吉著	作歌餘錄	古今書院發行 定價二圓六十錢
第四十七編	齊藤茂吉著	念珠集	鐵塔書院發行 定價二圓
第四十八編	發アラ行ラ所ギ編	昭和四年年度年刊歌集	岩波書店發行 定價一圓五十錢
第四十九編	加納曉著	加納曉歌集	古今書院發行 定價二圓二十錢
第五十編	齊藤茂吉著	短歌初學門	近刊

第五十一編	今井邦子著	紫	草	岩波書店發行 定價二圓三十錢
第五十二編	築地藤子著	椰子	葉	岩波書店發行 定價二圓
第五十三編	森山汀川著	峠	路	古今書院發行 定價二圓二十錢
第五十四編	久保田不二子著	苔	桃	岩波書店發行 定價二圓二十錢
第五十五編	アララギ 發行所編	アララギ 昭和五年度	年刊歌集	近刊
第五十六編	高田浪吉著	砂	濱	岩波書店發行 定價一圓五十錢
第五十七編	アララギ 發行所編	アララギ 昭和六年度	年刊歌集	近刊
第五十八編	白水吉次郎著	白水吉次郎歌集		古今書院發行 定價一圓五十錢
第五十九編	高田浪吉著	現代短歌の鑑賞		古今書院發行 定價一圓五十錢
第六十編	今井邦子著	茜	草	古今書院發行 定價一圓八十錢
第六十一編	土田耕平著	斑	雪	古今書院發行 定價一圓五十錢

以下續刊

